

Global Trends 2030

福田幸正
主任研究員
(公財) 国際通貨研究所

2012年12月10日、CIAやG-2などの米国の17の情報機関を束ねる国家情報会議(NIC: National Intelligence Council)は2030年までの長期世界潮流を検討した報告書を発表した(Global Trends 2030)¹。NICは大統領が選出(再選)される年に合わせて4年に一度その時点から15年程度の将来を見据えた報告書を発表しており(今回で5回目になる)、新政権に長期的戦略的視点を提供することを旨としている。なお、報告書は単なる未来予想ではなく、基本的潮流やそのインプリケーションを踏まえ、世界の、そして米国の将来を考える際の枠組みを提供することに主眼を置いている。報告書草稿に当たってNICは、米国内はもとより20ヶ国もの国の政府、財界、大学、シンクタンクなどからも広く意見聴取している。

グローバル金融危機が起こってから不確実性が重苦しく世界を覆っているせい、この手のシナリオ分析は大流行だ。しかし、NIC報告書は冷戦の終焉に直面して米国が必要に迫られて1990年代半ばから定期的に発表しているものである。それも世界一の米国インテリジェンス・コミュニティがその総力を挙げて新米国大統領に上呈する戦略構想参考書である。そんじょそこらのシナリオ分析とは格が違うはずだ。ところが、発表と同時に日本のマスメディアや関心のある個人のブログなどにNIC報告書の概要が紹介されたが、どれも何となく皮相的な内容だ。それではと、この際、NIC報告書そのものを端から端まで読んでみることにした。

全体的な主要メッセージは次の通り。

- 2030年までは、米国は「幾つかの列強の中の一番の大国」(“first among equals”)としての地位を占め続け、米国に代わる大国、米国を中心とする国際体制に代わるものは出現しない。すなわち、米国の相対的な地位低下によって、従来のような米国一極時代は終わるが、どの国も覇権国にはなれない。
- 中国、インドの台頭によって、アジアが欧米を凌駕する時代が到来する(GDP、人口、軍事費、技術投資)。

NIC報告書の構成と概要は次の通りである。

最初に4つの基本潮流(Megatrends)が挙げられている。そして、相互に関係し合う6つの不確定要素(Game-Changers)を挙げ、その上で、4つのベストからワースト

¹ <http://www.dni.gov/index.php/about/organization/national-intelligence-council-global-trends>

のシナリオ (Scenarios) が提示されている。

基本潮流 (Megatrends)

まず、今後 2030 年までに十中八九変わらないであろう 4 つの基本潮流(Megatrends) が挙げられている。

- 個人のエンパワメント (individual empowerment) : 貧困削減により世界人口の過半が貧困脱却、各国とも中間層が拡大、教育の普及、ICT の普及、保健の進歩。これらにより、個人の能力向上が加速する。
- 国家の力の分散 (diffusion of power) : 覇権国の不在、多極化世界の中の多層的ネットワークに権力がシフト
- 人口パターンの影響 (demography) : 世界人口 83 億人 (2030 年。71 億人 : 2012 年)、平均寿命の伸び、高齢化先進国の成長低化、若年層の多さが社会不安定化要因に (アフリカ、南アジア)、都市化の進展、移民の増加
- 食糧、水、エネルギーの連関増大 (energy, water, food nexus) : 世界人口増加に伴い、食糧、水、エネルギー需要増、供給不足深刻化

不確定要素 (Game-Changers)

基本潮流 (Megatrends) とは別に、重要だが今後どのように展開するか分からない 6 つの不確定要素 (Game-Changers) を挙げている。なお、これらの不確定要素は互いに作用しあう。

- 危機に陥り易い世界経済 (Crisis-Prone Global Economy) : 世界経済の不安定、不均衡が世界経済崩壊を招くか、あるいは、多極化が世界経済体制を強靱化するか？先進国の課題は高齢化。中国、インドにとっての課題は「中所得国の罨」
- ガバナンス・ギャップ (Governance Gap) : 急速な社会変動に現在の (国家、国際機関の) ガバナンスの形がついて行けるか？そのような中で大都市、地域共同体の存在感が上昇。ICT は国家による市民監視にも効果的であり両刃の刃ともなりうる。
- 国内・地域紛争の増加 (Potential for Increased Conflicts) : 資源を巡り、また、若年男性を多く抱える国 (サブサハラ、南アジア、中東の一部) で紛争がぼっ発する可能性が高まる。中東は民主化に伴い最も不安定な地域であることに変わらず。アジア、中東地域における紛争で核の使用が検討される可能性あり。

- 地域的不安定 (Wider Scope of Regional Instability) : 中東、南アジアは未だに有効な地域安全保障のための枠組みを編み出しておらず、地域紛争の影響がグローバルに波及するおそれがある。
- 新技術のインパクト (Impact of New Technologies) : 新発明が生産性向上、人口増加、急速な都市化、気候変動への対処に間に合うか？
- 米国の役割 (Role of the United States) : 米国は「幾つかの列強の中の一番の大国」(“first among equals”)としての地位を占め続けるが、従来のような米国一極時代は終わる。そのような中で米国は世界をリードし続けることができるか？

シナリオ (Scenarios)

以上を踏まえ、以下の4つのベストからワーストの順でシナリオが示されている。なお、これらのシナリオは明確に分かれた形で現れるのではなく、重複もありうる。

- 融合 (Fusion) : どのどの融合かといえば、米国と中国。様々な分野で米中が協調し合うことがベスト・シナリオとして明示されている（これに関しては私見を後述）。
- 非国家組織が活躍する世界(Nonstate World) : 国家の問題解決意欲と能力の欠如に対応して、新技術や教育などによってエンパワーされた個人や組織が、ネットワークを駆使して国家に代わってあるいは協働してグローバルな問題に取り組む世界。反社会的な個人や非国家組織もエンパワーされることがリスク。
- 格差社会、分断社会の蔓延 (Gini Out of the Bottle) : 国家間、国家内格差の拡大。紛争の可能性増大。破綻国家の増大。米国は世界の警察官の役割を担いきれず。
- 失速世界 (Stalled Engines) : 米国と欧州は世界の指導者としての役割を担うことを放棄。途上国では、腐敗、社会不安、脆弱な金融制度、慢性的なインフラの未整備、これらが相まって低成長が常態化する。途上国でパンデミックがブレークアウトするが国際社会はその拡大を止められず、先進国は途上国との接触を遮断、世界経済は低迷。

以上が、NICのGlobal Trends 2030の大まかな概要である。

既にお気づきであろうが、これはあくまでも米国にとっての長期予想であり、米国にとってのシナリオである。そして米国は急速に台頭する中国と上手くやっていくことを最も好ましい姿、ベスト・シナリオ (Fusion) として描いているのだ。

この報告書のユニークなところは、読者に4つのシナリオをより分かり易くイメージさせるために、架空のエピソードを載せていることだ。その中で、ベスト・シナリオ（Fusion）では、次のような架空エピソードが述べられている。

「・・・インドとパキスタンの間の緊張が高まり一触即発の事態に発展する。そこで主要な列強が問題解決のために積極的に介入し始める。その中で中国の活躍が飛びぬけていた。中国はワシントンに密使を派遣し、停戦協定案を詰め、米中はこれを国連安保理に共同提案する。中国はパキスタンへの巨額の援助を約束しパキスタンの暴走を抑える。一方、米国と欧州は協調してインドに経済制裁をちらつかせ国境からの兵力撤退を実現させる。停戦合意に留まらず、米中は今回の事案をカシミール問題の根本解決合意まで持ち込む。誰しも長年の懸案がかくも見事に解消するとは予想だにしていなかったが、米中両首脳の個人的な信頼関係に負うところが多いとされた。米中両首脳の外交所力は国際社会から大いに評価され、揃ってノーベル平和賞を受賞する。・・・」

つまり、NICは米中関係の飛躍的な発展のためには、このような大紛争を伴うかもしれないドラマチックなシナリオを構想していることがポイントだ。米中関係の進展のためにはインドやパキスタンも利用されうるということだ。これを読んだインド人とパキスタン人はいったいどう思うだろうか？この場合、パキスタンの後見人としての中国と、インドの後見人としての米国の存在という構図があればこそ、架空のエピソードであっても、もっともらしく仕立て上げることができたが、極東でも同じような構図はありえないだろうか？北朝鮮と中国、日本と米国・・・この先は個々人の想像にお任せしておいた方がいいだろう。

冒頭で述べた通り、NICはGlobal Trends 2030の草稿に当たって、米国内はもとより20ヶ国もの国の政府、財界、大学、シンクタンクなどからも広く意見聴取している。しかし、巻末のAcknowledgementsの中には、米国、欧州、中国、中近東などの人名、機関名が列挙されているが、日本人や日本の機関の名前は一切出てこない。

最後に、昨今の日中関係の深刻化を巡る日本のある識者によるメッセージの一部を引用させていただきたい。

「・・・日本には三つの生き方がある。一つは、ユーラシア大陸極東の国として、大陸の盟主中国のジュニア・パートナーとなって二十一世紀をアジアの世紀にする。二つは、環太平洋圏の西の砦として、盟主米国のジュニア・パートナーとなって、自由とデモクラシーの価値観を守る。三つは、経済力・軍事力を含む世界第三位の総合的国力を維持し、米中の中で無視しえない存在として世界の均衡力の機能を果たす。どれを選んでも大変だが、どれも選ばないと確実に沈没する。」²

² 行天豊雄「新年の宿題」行天豊雄が語る 第6回（2012年12月）IIMA en フォーラム